

目的 第1報では、歩き始めの子供の靴について、その保育者を対象に着用実態を調査し、消費科学的考察を試みた。その調査結果から、「成長を考慮して大きめのサイズの靴を選択する」実態やその適合度に問題があることが認められた。そこで本報では、それらの乳幼児を対象に足部計測を行い、発達の度合を縦断的に考察した。

方法 被検者は第1報の対象となった乳幼児207名である。計測項目は、足長、足幅、足高など7項目であり、マルチン人体計測器の他、山越製作所 足高計測器を用いた。各被検者に対し4か月毎に1年間、追跡的計測を実施した結果から、成長状態、各項目間の相関などについて考察を行った。

結果 足長、足幅、足囲ボールはいずれも、4か月毎に危険率1%の有意な増加を示した。しかし、足高および足首囲には第3回から4回の計測で減少傾向がみられ、直線的増加をたどらないことが認められた。各項目の相関関係については、足長と身長に高い相関がみられ、足長は身長から推定可能であることがわかった。また、足長と他の足部計測項目間にも相関関係が認められたが、足高については足長はじめ、他の項目とも相関が認めにくく、足長を基準とした靴において、足高が最も適合しにくいとされた第1報の調査結果と一致した。第1回計測値を因子分析した結果、第1因子「月齢」、第2因子「出生時の体格」、第3因子「足部サイズ」、第4因子「足部充実度」が抽出された。成長につれて因子構造に若干の違いがみられたため、月齢別の結果についても検討を加えた。